2021年11月4日 高知新聞

明徳 PK戦を制す

▽準決勝

明徳	1	延長	1	西
	0-1		0-0
	0-0		0-1

（PK5-4）

▽得点者【明】原山【西】安岡

【評】ボールを保持しながらラインを上げる西に対し、明徳は5バックで守備を固めてカウンター狙い。前半終了間際に狙いがはまり、原山のゴールで先制した。後半に失点したが、集中力のある守備陣が、シュート13本を放った西の猛攻に耐えた。PKは5人全員が決める一方、GK山川に好セーブが飛び出した。

西は後半36分、左サイドの高橋桐からのボールを安岡が押し込んで同点に追い付く。しかし、その後は延長でも明徳の守備を崩しきれなかった。

（仙頭達也）

明徳カウンター一閃

カウンターでワンチャンスをものにする―。明徳の狙いは明確だった。180センチ台の選手をそろえる西に、ロングボールを入れてもはじかれてしまう。ならばと、5バックで引いて守って相手をおびき寄せる。西の最終ラインがハーフウエーラインを越えるほど高くなるのを見て、小松監督は「あっ、これはいける」と確信を得たという。

まさにその狙いがはまった前半ロスタイムの先制シーン。相手の攻撃をクリアしたセカンドボールを明徳が回収し、ボランチ前田に渡ると、「原山がいい形をつくっていた」とワンタッチで大きく前線に蹴り込んだ。

「DFラインの足が止まっていた」と狙い澄ましていたCF原山は一気に加速。追ってくるDF2人を置き去りにしてGKと1対1となり、「一発で決めないとチャンスはない。強い気持ちでシュートした」と右足を一閃した。

この場面もそうだが、守勢に回る時間帯が多くても、選手たちが走り勝てたのには理由がある。芝の張り替えで学校のグラウンドが使えなかった夏場。ボールに触れることなく、ひたすら走り込んだ。体力では負けないという自信が、プレーにつながった。PKで好セーブを見せたGK山川も「どこよりもしんどい練習をしてきたから、自信を持って止められた」。

一つの作戦を徹底するチーム力と、延長を終えても誰も足をつらない体力。タレントがそろっていた昨年とは違う姿で、連覇を狙う。

（仙頭達也）

西 敗戦にも充実感

明徳相手に多くの時間で試合をコントロールした西。「賢守賢攻」。全国を目指して掲げたコンセプトは、さらなる進化を見た。PK戦の末に敗れても、その挑戦は色あせない。ゲーム主将高橋は「いいサッカーができた」。目を赤くしつつ、充実感をにじませた。

「賢守賢攻」。その心は堅守速攻からの脱却。「守り一辺倒にならず、自分たちでゲームを支配する」という決意表明だった。試行錯誤を繰り返した。実際、2017年に全国切符をつかんだものの、1回戦で0-3の完敗。翌年も0-6だった。ただ、「全然通用しなかった」（寺尾監督）からこそ、改革は加速した。

この日の明徳戦。敵陣に全員が入ってボールを回す。カウンターで先制されても焦らないのは「1点取られたら2点取るサッカーを目指してきた」（高橋）から。ギアを上げた後半はシュート8本。この何年かの西の積み上げを考えれば、後半36分に生まれたMF安岡の同点弾は、あるいは必然だった。

目指す方向に間違いはなかった。「この挑戦に終わりはない」と寺尾監督。改革は続く。

（平野愛弓）

【準決勝　明徳―西】PK戦を制して喜ぶ明徳のGK山川⑫＝右＝と5人目のキックを決めた林⑩